

# 山東淄川方言の連読変調

## 黄 當 時

### §1. 正字と当字

漢字は形・音・義の三要素から成り立っている。当字もまた、この三要素を発想の出発点とするのが普通であろう。

先ず形からの発想であるが、この例はあまり多くない。一部の学生がレポートを書く際、正しい文字を知らない為に、脳裏にあるかすかなイメージパターンを再現した結果、存在しない漢字を自作してしまったり、字書を引いて確かめられないのか、…到しますというのを時々見ることがある。これに比べると、音からの発想はずっと多くなる。この数日間に目にしたものだけでも雜紙や着陸体制・Aは以前としてBだ等を挙げることができる。このような例においても、ある程度は意味面との整合性が考慮されているかも知れないが、発想の起点としてはやはり音声からであると考えられる。最後に義であるが、形・音を無視した、義のみに拠る発想は理論上ありえても、現実にはなかなか目にすることがない。これは中国語についても同様と考えられるため、以下中国語における状況を音声の面から見ていくこととする。

『新華字典』（1971年修訂重排本）には、“体 ⊖ ti [体己] [梯己] (-ji) 1. 旧俗家庭成員個人積蓄的財物。 2. 親近的：～～話。”とあるが、<sup>(9)</sup>同様に『現代漢語詞典』で体の第一声を引くと、“体 ti [体己] (ti·ji) 見『梯己』。另見 ti。”とあり、更に梯の項を引くと“【梯己】【体己】(ti·ji) ①. 家庭成員個人積蓄的(財物); 私房①: ~錢。 ②. 親近的; 貼心的: ~人 | ~話。”という説明を得ることができる。さて、『新華字典』しか見ていなければ、体が本字で梯が当字である、と考えても差し支えなさそうであるし、『現代漢語詞典』しか見ていなければ、梯が本字で体が当字である、と考えても正しそうな気がするであろう。では、両者の記述を見た者は一体どのように考えればよいのであろうか。二つの物を並べる時には必ず順序ができるが、何を根拠にどちらを優先させるのか。上の例において『新華字典』の編者は体を優先させ、『現代漢語詞典』の編者は梯を優先させているが、恐らくどちらともはっきりした根拠を持たないものと思われる。身体の近くを連想させるからと考えようが、梯子の裏を連想させるからと考えようが、基本は何であるのかを忘れてはいけない。どの文字が使われるにせよ、“家庭成員個人積蓄的(財物)……”という概念とそれを言い表す発音(北

京方言では  $t\dot{i} \cdot j\dot{i}$  という発音) とが先に生じ、後から文字が当てられたのであって、決してその逆ではないのである。つまり、体己や梯己という表記を決めてから、読みや意味を決めたのではないということである。

ここでもう一例について見ておきたい。『新華字典』には“縹<sup>㊦</sup> piāo [縹緲] [飄渺] (-miǎo) 形容隱隱約約的, 若有若无: 山在虚无~~間。”とあり、『現代漢語詞典』では“縹 piāo 見下。另見 piǎo。【縹緲】 piāomiǎo 形容隱隱約約, 若有若无: 虚无~。也作飄渺。”としている。『現代漢語詞典』における他の“也作…”の用例から見ても、特に優先順位があるとは考えられない。因みに、同書の飄渺を見ると、“【飄渺】 piāomiǎo 見【縹緲】。”とある。やはりどの字を使用しようとも、元になる基本の音声は、北京方言の場合 piāomiǎo なのである。<sup>(9)</sup>

## §2. 変調パターンの異同

現在の北京音を解する者には梯己(という表記)は理解できても、体己(という表記)は理解しにくい。前者は自然に  $t\dot{i} \cdot j\dot{i}$  に読めるが、後者は  $t\dot{i} \cdot j\dot{i}$  (若しくは  $t\dot{i}j\dot{i}$ ) になってしまうからである。 $t\dot{i} \cdot j\dot{i}$  という音を示すのに、何故わざわざ読み間違えられる字を当てたのか、体己は間違いで梯己だけが正しいのではないか、という見方も出て来るであろう。縹緲と飄渺についても同じことが言えよう。ここで注意しなければならないのは、現在の私達から見て理解しにくい表記であっても、創作した時点ではいずれも正しかった(筈な)のである、という立場に立って問題を解いていかねばならないことである。さもなければ、説明しにくい例は安易に無視・抹殺されてしまうことになりかねない。ここで、正しかった(筈の)物が何故正しく見えないのか、正しさにずれが出来たのは何故なのか、という疑問が生じる。

現在の北京方言の変調パターンは以下のようにまとめることができる。

表1. 北京方言の二字連続変調

下字本調 上字本調	陰 平 55	陽 平 35	上 声 214	去 声 51
上 声 214	21-	21-	35-/(21-)	21-

連続の際に、上声調字(214)は上声調字(214)の前において、調値が35-<sup>(9)</sup>に変わり、その他の声調字の前では21-に発音され、半上声と言う。ただ、極一部ではあるが、奶奶・姥姥・姐姐など半上声に変調するものがあり、表1では数が少ないため括弧( )を付けて(21-)とした。

変調がなぜ生起するのか、そのメカニズムは未だ明らかではないが、一般に変調現象は次の3種に帰納することができる。

(A類) いずれかの本調調値と特定される変調調値をもつもの。

山東淄川方言の連読変調

(B類) いずれの本調調値とも特定されない変調調値をもつもの。

(C類) 変調しないもの。

表1を例にとって言えば、上声 214 が 35- に変調するのはA類に属するものであり、21- に変調するのはB類に属するものである。陰平・陽平・去声は変調しないので表にはないが、C類に含められる。本稿では、以下変調パターンをいう場合、A類に含まれる変調のみを取り上げる。

さて、梯己と飄渺は変調を起こしていないため、表1に拠るまでもなく問題は無いが、体己と縹緲という表記は表1に拠っても説明できない。実は、表1は表層の現象を説明しているだけであるため、その下に横たわる基層を考えねばならない。それは、とりあえず本稿で扱う特殊な例(表層における普遍的な変調規則では説明できない例)を説明できれば良い。すると表1は次のように改めることができる。

表2. 北京方言の上声の変調パターン

層 別	下字声調	陰 平	陽 平	上 声	去 声
	表 層				陽平-
基 層			(陽平-*)	陰平-*	

表2において、表層は、上声が上声(或いは上声に由来する軽声)の前において、陽平声に変調することを示しており、基層は、上声が上声(或いは上声に由来する軽声)の前において、陰平声に変調することを示している。基層は、体己・縹緲を説明するために再構したものであるが、この二例以外にも、以下の通りいくつかの特殊な変調例があり、全てこの基層の変調パターンに当てはまるのである。

- 指甲 zhi 陰平<sup>(6)</sup>
- 吵嚷 chao 陰平<sup>(6)(7)</sup>
- 解手儿 jie 陰平<sup>(6)(8)(9)</sup> (以上中古上声字)
- 骨朵儿 gu 陰平<sup>(6)</sup>
- 脚手架 jiao 陰平<sup>(6)</sup> (以上中古入声字)

これらの例はいずれも普通の変調規則(表1或いは表2に言う表層における変調規則)通りの変調ではない。本来ある層の上に別の層が被さると、本来の層は基層となり、被さった層は表層となる。一度表層によって覆われると、基層の状況は時間の推移と共に次第に見失われてしまう。そのため基層に属す例は破読という形で散発的にしか見られず、その上、減少こそすれ増加することはないため、その採集・記録は早めに行われねばならない。

§3. 情管と請管

『聊齋俚曲集』に次のような例がある。

- (1) 你既飽了，且找个避風去処，且慢慢帰家。情管我着他两个争着事奉你。（『墻頭記』第二回、831頁）
- (2) 情管那令郎歡喜，都争着把你養活。（同上）
- (3) （二相公説）列位，外辺歇歇，家里拾掇拾掇，好跟您去，請管逃不了就是了。（『磨難曲』第六回、1385頁）
- (4) （店主説）相公不必煩惱。誰叫我不小心来？請管還給你相公買一个好驢。（同上第七回、1391頁）

『現代漢語詞典』には、情管・請管共に無く、『新華字典』にも当然ながら無い。蒲松齡は淄川出身で、『聊齋俚曲集』は淄川方言で書かれている。作品の中では情管は請管とも書かれるが、今日私達がこれらの例を読んで特に違和感を覚えないのは何故であろうか。それは私達が無意識の内に請管の請を変調させて情管の情と同音に読んでいるからである。全く同じ音声に読めるため、何らひっかかりを感じないのである。この無意識の変調が（でき）ない人は、当然のことながらひっかかりを感じてしまう。このことは何を意味するのであろうか。それは、蒲松齡の変調パターンと私達のそれとが同じということに外ならない。実際には、作者と私達のみならず、活字を組んだ者、校正をした者、そして他の多くの作品を読んだ〔読んでいる〕者……も同じ変調パターンを持っていた〔持っている〕と考えられるのである。蒲松齡は明崇禎13年（1640）に生まれ、清康熙52年（1713）に没しているので、その言語は明末清初（17、18世紀初期）の漢語の状況を反映していると言えるであろう。この頃の変調パターンが19世紀において何か別のものに変化し、更に20世紀になって元のパターンに戻ったのではないとすれば、彼の変調パターンと私達が今日使用するパターンとは一脈相通じるものがあることとなる。

さて、『漢語方言詞匯』所載の方言点で、この方言に最も近いのは済南である。ただ、『漢語方言詞匯』では変調がないとされるが、錢曾怡「済南話的變調和輕聲」によると、済南方言の変調パターンは次の通りである。

表3. 済南方言の二字連読変調

		下字本調			
		陰 平 213	陽 平 42	上 声 55	去 声 21
上字本調	陰 平 213	23-	212-	212-	23-
	陽 平 42	(不變)	43-	(不變)	55-
	上 声 55	(不變)	(不變)	42-	(不變)
	去 声 21	(不變)	(不變)	(不變)	23-

## 山東淄川方言の連読変調

陰平調字は陽平と上声調字の前において 212- に変わるが、これは陰平本調 213 の変体と考えられる。また陰平と去声調字の前において 23- に変わる。陽平調字は陰平・上声調字の前においては変調せず、陽平調字の前において 43- に変わるが、これは陽平本調の変体で、去声調字の前において 55- (上声本調の調値に同じ) に変わる。上声調字は陰平・陽平・去声調字の前においては変調せず、上声調字の前において 42- (陽平本調の調値に同じ) に変わる。去声調字は陰平・陽平・上声調字の前では変調せず、去声調字の前において 23- に変わる。

表3の変調パターンのうち上字本調が上声のものは、上述の考察結果から、17世紀においても有効であった、即ち、その起点を少なくとも17世紀に持って行くことができる、と考えられる。地理的には、済南方言圏と北京方言圏とは非常に近く、人々の交流は頻繁で、様々な面において相互に影響を与えて来たが、両方言圏で人々が情管と請管とを同音に読み続けて来たのであれば、表1及び表2の表層の変調パターンも同様に少なくとも17世紀から有効であったと考えることができる。従って、表2の基層の変調パターンはそれ以前のものとなる。

では、済南方言にも基層が存在したであろうが、それはどのような変調パターンを持っていたのであろうか。『漢語方言詞匯』によれば、“指甲”の意味を表す単語は済南方言では“指甲蓋”といい、“指55”が“指213- (陰平-)”に変調するが、これは表3の変調規則では説明できない。つまり表層に属さない変調パターンなのである。他に“小伙子”の例があり、“伙”が 213- (陰平-) に変調している<sup>93</sup>。これらの例は表2の基層で容易に説明できる。即ち済南方言にも表2と同様の基層変調パターンを考えれば良いのである。これをまとめると表4のようになる。

表4. 北京・済南方言の上声の変調パターン

層 別 \ 下字声調	陰 平	陽 平	上 声	去 声
表 層			陽平-	
基 層		(陽平-*)	陰平-*	

### § 4. 変調がもたらす調類の変更

『新華字典』(1971年修訂重排本)に拠れば、“潦<sup>93</sup> ⊖ liǎo [潦倒] 頹喪, 不得意。[潦草] 草率, 不精細: 工作不能~~。字写得太~~。”とあり、『現代漢語詞典』に拠れば、“潦 liǎo 見下。另見 lǎo。【潦草】liǎocǎo ① (字) 不工整: 字迹~。② (做事) 不仔細, 不認真。【潦倒】liǎodǎo 頹喪; 失意。”とある<sup>93</sup>。上声+上声のケースなので、北京方言の変調パターンを使って陽平+上声に読め、ということであろう。但し、辞書のどこを見ても変調せよとは書かれていないし、上声+上声がどう変調するのかも記されていない<sup>94</sup>。ところが『新華字典』

(1988年新訂版)に拠れば、以下に引用した通り liǎo が無くなり、liáo となっている。“潦 ⊖ liáo [潦倒] 頹喪, 不得意。[潦草] 草率, 不精細: 工作不能~~。字写得太~~。”となったが、変更されたのは声調だけで、他は一字一句変わらない。実際問題として、潦了倒や潦着倒、或いは潦了草や潦着草という言い方がない以上、潦 liǎo という発音は絵に描いたモチと同じで、現実には人々が口にすることはない。辞書の表記は、本調調値が liáo ならば、次の(1)のようになり、liǎo であれば(2)のようになる。

(1) 潦 liáo [潦倒] 頹喪……。 [潦草] ……。

(2) 潦 liǎo [潦倒] 頹喪……。 [潦草] ……。

(1)(2)の間に優劣は特になさそうであるが、仮に未来の人間に、20世紀の北京方言において上声+上声が陽平+上声に変調したという知識が無くとも、(1)の表記は実際の音声を知らせることができる、という点でより好ましい。また、(1)の表記はあっさり調値と調類を取り替えたのであるが、ここまで思い切ったことができない辞書の編者は(1)と(2)とを折衷したものを作る可能性もあろう。それが次の(3)である。

(3) 潦 ① liáo [潦倒] 頹喪……。 [潦草] ……。

② liǎo [潦倒] 頹喪……。 [潦草] ……。

(3)を見せられれば、同じものなのに、どうしてわざわざこうするのか、と考える向きも出るだろう。はて、どこかで同じような疑問を持ったことがあるようだ……と考えて『広韻』を思い出す人もいるかも知れない。例の形態的な派生関係が明らかでない多読字である。以前から不明とされて来たものであるが、これまで解けなかった問題を解くには、視点を変えて新たな方法を採用するしかないであろう。変調調値が本調調値となり、それに従って調類も変更される、ということは利用に値するのではないだろうか。

ここでもう1例見ておきたい。眯は『新華字典』(1971年修訂重排本)では“眯 ⊖ mǐ 塵土入眼, 不能睜開看東西。”と説明があるだけで例がないが、『現代漢語詞典』には“眯 mǐ 塵埃等雜物進入眼中, 使一時不能睜開看東西: 沙子~了眼。”とある。これを見た者は誰でも例文を mǐ le yǎn と読んでしまうであろうし、それが正しそうでもある。言い換えれば、眯眼においては、míyǎn (←mǐyǎn) と読み、眯了眼においては、mǐ le yǎn という具合に読むので陽平と上声の2音がこの世に存在することになる筈だが、残念ながら実際には、後者には mí le yǎn という読みしか観察されない<sup>69</sup>。つまり現実には mí しか存在しないのである。ところで、『新華字典』(1988年新訂第6版)は“眯 ⊖ mí 塵土入眼, 不能睜開看東西。”と、他の部分をいじらずに声調だけを陽平に変えてしまった。こうすれば、変調規則を知らずとも眯眼は míyǎn と読めるし、眯了眼も現実の音声通りに mí le yǎn と読める。眯眼という結合において本来変調調値であった mí- が、人々の意識の中に圧倒的な優勢を占めた結果、眯了眼という結合の中でも本調調値 mǐ を駆逐してしまったのである。その過程は次のように考えることができるであろう。

- míyǎn (←mǐyǎn)/mǐ le yǎn (変調と本調)  
 ⇨ míyǎn/mǐ le yǎn (二種の本調)  
 ⇨ míyǎn/mǐ le yǎn (本調)

§5. 終りに

以上見て来た通り、情管と請管とは誤植か何かによるもので一方が正しく他方が間違いで訂正しても構わない、といった単純なものではなく、作者の使用した言語或いはその生活圏において、上声+上声の組合せを陽平+上声に読み替える変調パターンがあったことを示す資料である。変調パターンを応用することにより、誤字とされたものが誤字という程のものではなく、形態的な派生関係が明白ではない一部の多読字をも説明できるのである。

注

- (1) 『新華字典』（1988年新訂第6版）では“旧俗”の2字を削除している以外は全て同じ説明を踏襲している。経済的に余裕ができ、へそくりが普遍的に見られるようになったからであろうか。
- (2) 『広韻』によれば、縹の読みは“敷沼切”と“徧小切”である。他に、縹眇・縹渺・縹眇という表記があり、§2に言う基層読みに属する。『文選』に木華「海賦」“群山縹眇，餐玉清涯。”と王延寿「魯靈光殿賦」“忽縹眇以響像，若鬼神之彷彿。”がある。飄眇は『文選』「成公綏嘯賦」“洌飄眇而清昶。”がある。
- (3) 35- は陽平本調の調値と同じであるが、この変調後の陽平声と本来の陽平声とが果たして全く同じ調値を持っているのか、という議論もあるが、ここではこの問題には立ち入らず、両者に違いはないものと見なして論を進める。以下、連読変調に由来すると考えられる陰平声等の調値と本来のそれとの問題に関しても同様に扱う。これは、客観的な観察と、話し手の主観的な意識との間にさしてずれを認めることがないからであり、さらにはまた北京方言以外の方言をも扱うため、方言間で凸凹がないよう、同等レベルの資料を使つての議論を考えるからである。このような観点から、少数の特殊な変調は取り上げていない。例えば、『中国語学辞典』には、陽平声が連続すると34+35に（例：和平）、去声が連続すると53+51に（例：電報）変わる、と説明されている。
- (4) 例が少なく変調パターンも不規則なことから、手っ取り早く他方言からの借用と考えることもできようが、その場合、具体的な方言（名）を挙げねばならず、簡単に解決できそうに見えて実はなかなか難しい。というのも、被借用方言が政治的・文化的に借用した側より優勢であり、その上、パターンを同じくする連読変調があること（或いはあったこと）を示さなければならぬからである。
- (5) 『新華字典』（1971年修訂重排本）によれば“指① zhǐ 義同‘指①①’，用于指甲等。”とあり、『現代漢語詞典』には“指 zhǐ 義同‘指’(zhǐ) ①，用于‘指甲、指甲花’等。”とあるものの、『新華字典』（1988年新訂第6版）では第一声を削除している。黄名時「北京音と“普通話”標準音——北京語常用異読語彙の調査研究——」によれば“指 zhǐ”の調査では「指甲」・「指頭」の単語を収録したが、北京音としては、前者は zhǐ 音 (zhǐjia) が優勢を占め、後者は逆に zhǐ 音 (zhǐtou) が有力である。」という状況にある。
- (6) 吵嚷と解手儿の2例は、田中秀・鳥居鶴美共著『華語破音字例解』（序文1955年、永和語学社）による。
- (7) 吵嚷の例は、愛知大学中日大辞典編纂処編『中日大辞典』増訂版にも見える。
- (8) 『京本通俗小説』「錯斬崔寧」に“叙了些寒温，魏生起身去解手。”がある。
- (9) 黄名時「北京音と“普通話”標準音——北京語常用異読語彙の調査研究——」によると、現在の北京

## 文学部論集

で解手儿を jie- に読む者と jie- に読む者とはほぼ半々である。言い換えれば、本稿で言う基層読みと表層読みとが拮抗して共存している、ということになる。

- (10) 『新華字典』（1971年修訂重排本）では、gū には他に、“骨碌”があり、gú には“骨頭”があるが、1988年新訂第6版では gú を削除している。基層では上声+陽平を陽平+陽平に読むパターンがあったのかも知れない。例が少ないため表2では括弧（ ）を付した。詳しくは拙稿「關於北京話上声的特殊變調」を参照されたい。
- (11) この例は、徐世榮「普通話語音和北京土音的界限」（『語言教學與研究』1979年第1期所収）による。
- (12) 『漢語方言詞匯』203頁には“小<sup>55</sup>伙<sup>218</sup>子<sup>0</sup>”とあるが、正しくは“小<sup>55</sup>伙<sup>55</sup>子<sup>0</sup>”とすべきである。
- (13) 『広韻』には、「潦：雨水（上声、盧皓切）。」と「滂：淹也又水名或作潦。潦：上同（去声、郎到切）。」とがある。
- (14) このことは他の辞書も同じであり、『広韻』も例外ではない。
- (15) 『広韻』には、「暍：物入目中（上声、莫禮切）。」とある。
- (16) 黄名時「北京音と“普通話”標準音——北京語常用異読語彙の調査研究——」による。

### 参考文献

- 『新華字典』1971年修訂重排本、商務印書館 1976年。  
『新華字典』1988年新訂第6版、東方書店 1988年。  
中国社会科学院語言研究所詞典編輯室編『現代漢語詞典』商務印書館 1980年。  
北京大学中国語言文学系語言学教研室編『漢語方言詞匯』文字改革出版社 1964年。  
『校正宋本広韻・附索引』芸文印書館 1976年。  
愛知大学中日大辞典編纂処編『中日大辞典』増訂版、大修館書店 1986年。  
中国語学研究会編『中国語学新辞典』光生館 1970年。  
錢曾怡：「済南話的變調和輕声」『山東大学学报』第1期 1963年。  
黄名時：「北京音と“普通話”標準音——北京語常用異読語彙の調査研究——」『名古屋学院大学外国語学部論集』第3巻第2号、名古屋学院大学産業科学研究所 1992年。  
隋文昭：「积“丁香”」『中国語文』総第214期 1990年第1期。  
黄當時：「關於北京話上声的特殊變調」『伊地智善繼・辻本春彦兩教授退官記念中国語学・文学論集』東方書店 1983年。  
黄當時：「北方・西北官話の声調交替について」『外国語・外国文学研究』第7期、大阪外国語大学大学院修士会 1983年。